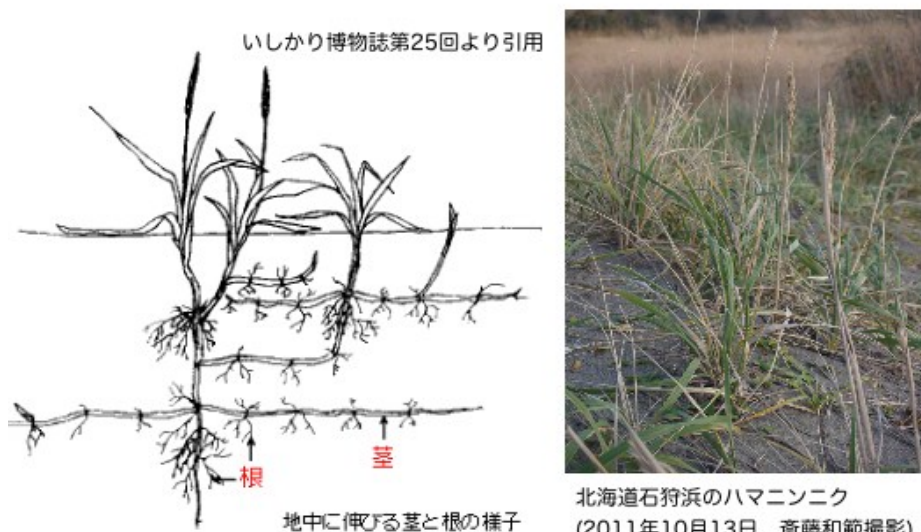


ハマニンニクの葉を用いた千島アイヌ伝統の テンキ(草箆)作り

講師：斎藤和範 (旭川大学地域研究所)

今回はテンキ作りの疑似体験をしてもらいますが、実際に草箆を編むには、とても長い時間がかかります。今回は、箆の底となる部分をコースターにします。

使用する植物はハマニンニク(2亜種あります)。テンキ(草箆)を編むために使われたことからテンキ草とも呼ばれます。海岸の砂丘に生えています。ニンニクという名前が付いていますが、ユリ科ではなく、イネ科植物です。エゾムギ属(*Elymus*)となっている文献もありますが、現在はハマニンニク属になっています。



ハマニンニクの2亜種の分布

- ・ *Leymus mollis* (Trin.) Pilg. subsp. *mollis*
朝鮮半島ー北九州ー北海道ー東シベリア・千島カムチャッカから、北米のアラスカー西海岸・北部カナダ・大西洋北部まで広く分布をしています。北海道にあるのはこの亜種です。
- ・ *Leymus mollis* subsp. *villosissimus* (Scribn.) A.Love
東シベリアーアラスカー北部カナダの、基亜種よりより寒いツンドラ地域に分布します。基亜種よりも寒冷地に適応し、毛が多くはえ、背丈が低いそうです。

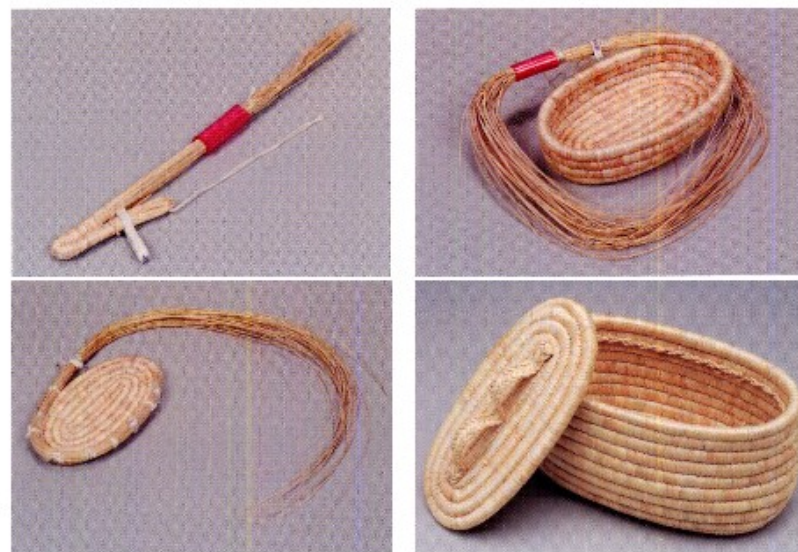
ハマニンニクは、アイヌ語でムリツ murit, 茎葉、(幌別)；ライムン ráy (死)-mun (草)、葉、(白浦、落帆)
 全草：煎じて食傷に服用。
 根：乾燥しておいて、風邪の時煎じて飲む。
 葉：乾燥して糸や針を入れる容器を編んだ。笠やゴザ、葬式の時に死者を包む平紐を作った。
 知里真志保「分類アイヌ語辞典植物篇」



ライブチヒ民族学博物館蔵

テンキの技法はコイリング編み(巻き上げ編み)と呼ばれ、千島アイヌのものが有名ですが、カムチャツカ半島やアリューシャン列島、北米のアラスカ・西海岸地域の先住民にも伝承されています。テンキは、函館市立博物館(4点)、開拓記念館(3点)、北大農学部博物館(3点)、ライブチヒ民族学博物館(5点)などに残されています。

しかしこの技法は、1875年の千島樺太交換条約締結時、北部・中部千島のアイヌが、日本政府によって色丹島へ強制移住させられ・同化政策が行われたことから、製作技術は失われていました。しかし最近、アイヌ文化の伝承者である知里真希さんによりこの技法が復元されています。下の写真はテンキの制作過程です。



右写真4点
国立民族学博物館蔵
2001 知里真希作成